

◎指示があるまで開かないこと。

(平成 26 年 2 月 9 日 16 時 00 分 ~ 17 時 00 分)

## 注 意 事 項

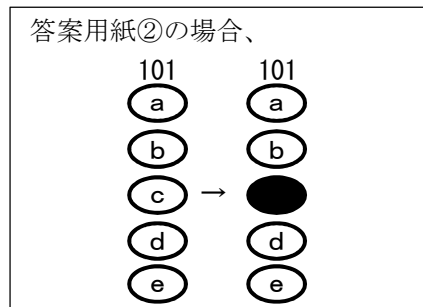
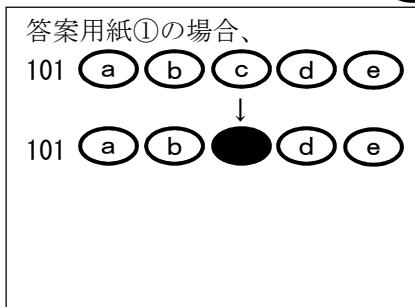
1. 試験問題の数は 31 問で解答時間は正味 1 時間である。
2. 解答方法は次のとおりである。

各問題には a から e までの 5 つの選択肢があるので、そのうち質問に適した  
 選択肢を 1 つ選び答案用紙に記入すること。

(例) 101 応招義務を規定しているのはどれか。

- a 刑 法
- b 医療法
- c 医師法
- d 健康保険法
- e 地域保健法

正解は「c」であるから答案用紙の **(c)** をマークすればよい。









- 1 医療法に定められていない施設はどれか。
  - a 病院
  - b 助産所
  - c 診療所
  - d 歯科診療所
  - e 介護老人福祉施設
  
- 2 妊娠により母体で増加するのはどれか。
  - a 残気量
  - b 心拍出量
  - c 血中ヘモグロビン値
  - d 血清アルブミン値
  - e 血清クレアチニン値
  
- 3 初診外来における医療面接について適切なのはどれか。
  - a 解釈モデルは最後に聞く。
  - b 身体診察中は病歴を聞かない。
  - c 医師の自己紹介は省略してよい。
  - d 冒頭では患者の訴えを遮らずに聞く。
  - e 閉じられた質問〈closed question〉は使わない。

- 4 狭心症の症候として**考えにくい**のはどれか。
- a 悪 心
  - b 息切れ
  - c 左肩痛
  - d 前胸部絞扼感
  - e 針で刺すような痛み
- 5 発熱がみられるのはどれか。
- a 前置胎盤
  - b 細菌性膣症
  - c 子宮頸管炎
  - d 絨毛膜羊膜炎
  - e 胎盤機能不全
- 6 鎖骨下静脈穿刺後に、患者が息苦しさを訴えた。  
手技の合併症と**関連のない**身体所見はどれか。
- a 皮下気腫
  - b 頸静脈怒張
  - c 胸部の鼓音
  - d 呼吸音減弱
  - e 汎(全)収縮期心雑音

7 関節痛を伴いやすいのはどれか。

- a 尋常性乾癬
- b 尋常性痤瘡
- c 尋常性白斑
- d 尋常性魚鱗癬
- e 尋常性天疱瘡

8 日本蘇生協議会ガイドライン 2010 に基づいて、自動体外式除細動器(AED)によるショック実施後に直ちに行うべきことはどれか。

- a 胸骨圧迫を行う。
- b 頸動脈を触知する。
- c 呼びかけて意識の確認を行う。
- d 安全のために AED の電源を切る。
- e 呼気吹き込みによる人工呼吸を行う。

9 救急外来で点滴を行う場合の患者の年齢、病態、輸液製剤および注射針の種類のを組合せて適切なのはどれか。

	患者の年齢	病 態	輸液製剤	注射針の種類
a	6 か月	脱 水	5 %ブドウ糖液	留置針 (プラスチックカニューレ型)
b	40 歳	熱中症	5 %ブドウ糖液	翼状針
c	40 歳	消化管出血	生理食塩液	留置針 (プラスチックカニューレ型)
d	40 歳	全身けいれん	生理食塩液	翼状針
e	80 歳	心不全	乳酸リンゲル液	留置針 (プラスチックカニューレ型)

- 10 ショックを呈する成人外傷患者において、第一選択となる輸液路はどれか。
- a 鎖骨下静脈
  - b 肘正中皮静脈
  - c 手背静脈網
  - d 大腿静脈
  - e 脛骨骨髓
- 11 喫煙が発症のリスクファクターとなるのはどれか。
- a 過敏性肺炎
  - b 肺胞蛋白症
  - c サルコイドーシス
  - d 慢性閉塞性肺疾患(COPD)
  - e 肺リンパ脈管筋腫症(LAM)
- 12 自殺を図り意識のない患者に医学的侵襲を伴う処置が緊急に必要となった。患者の家族にはまだ連絡がとれていない。医学的侵襲を拒絶するような患者の事前の確固たる意思表示は確認できていない。
- リスボン宣言に基づく対応として正しいのはどれか。
- a 患者家族の到着を待つ。
  - b 直ちに処置を開始する。
  - c 倫理委員会の判断を待つ。
  - d 自殺企図の患者は処置しない。
  - e 患者の事前の意思表示を確認するまで待つ。



13 病院の質を測定する臨床機能評価指標〈クリニカルインディケーター〉は、①ストラクチャー(病院が有する基盤)、②プロセス(提供される医療の内容)、③アウトカム(提供された医療の成果)に分類される。

アウトカムに該当する指標はどれか。

- a 専門医数
- b 患者満足度
- c 年間総手術件数
- d 服薬指導実施率
- e 最寄駅からの距離

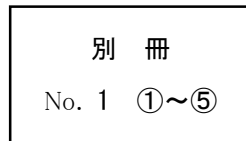
14 家族から聴取した患者の言動のうち、一次妄想と考えられるのはどれか。

- a 「夜眠れるかいつも心配しています」
- b 「『自分の考えていることが抜き取られる』と言ってます」
- c 「『いつもとは何か違って不気味な感じがする』と言ってます」
- d 「『気が重くて、自分をつまらない人間だ』と嘆いてばかりです」
- e 「難しい哲学的な言葉が多くて、何を言いたいのかわかりません」

15 喀痰の Gram 染色のために検体を採取した。検体の写真(別冊 No. 1 ①～⑤)を別に示す。

検体として適さないのはどれか。

- a ①
- b ②
- c ③
- d ④
- e ⑤



16 70歳の女性。不眠が続くことを主訴に家族とともに来院した。2週間前から不眠に対して抗不安薬を投与されているが、改善しないため受診した。本日、家族の話で、

1か月前に夫と死別したばかりであることが判明した。

まず行うべき対応として適切なのはどれか。

- a 経過観察する。
- b 患者の話を傾聴する。
- c 抗認知症薬を追加投与する。
- d 抗不安薬を抗精神病薬に変更する。
- e 精神科への医療保護入院の手続きを進める。

17 20年前、機械工場から化学物質が大気中に流出した。直後から地域で気管支喘息様の症状を訴える者がみられたが、一時的な流出で数か月後には症状を訴える者はなくなった。当時の調査では、個人の曝露量と急性の気管支喘息様症状の有病率とに相関が認められた。最近になって、この物質に曝露すると3年後から肝臓の悪性腫瘍による死亡率が増加することが報告された。このため、所管する地方自治体が周辺住民への健康影響を再評価することとなった。当時の個人の曝露量の情報は役所に保管されている。

新たに着手する調査について適切なのはどれか。

- a 当時の情報は破棄する。
- b 調査の着手について公表しない。
- c 地域の肝臓の悪性腫瘍による死亡率を調べる。
- d 現在の工場周辺の大気中の化学物質濃度を測定する。
- e 死亡者の遺族からインフォームド・コンセントを取得する。

18 51歳の男性。突然の右上腹部痛のため搬入された。救急外来で急性胆嚢炎と診断された。特に大きな合併症は認められなかった。生来健康でこれまでほとんど医療機関を受診したことがない。救急外来担当医から挨拶、病名告知に続いて次のような説明が行われた。

医 師「胆嚢炎で抗菌薬の点滴が必要です」①

患 者「分かりました」

医 師「入院が必要な状態ですが良いですか」②

患 者「しょうがないですね」

医 師「胆嚢内にたくさんの石と1.5cm位の大きさの腫瘍がありました」③

患 者「胆石と癌ですか」

医 師「胆嚢の腫瘍が悪性かどうかは分かりません」④

患 者「どうしたらよいのでしょうか」

医 師「明日、腹腔鏡下胆嚢摘出術をすることに決めました」⑤

患 者「えっ、明日ですか」

インフォームド・コンセントを得る過程における医師の説明として**適切でない**のはどれか。

a ①

b ②

c ③

d ④

e ⑤

19 3歳の男児。3歳児健康診査で心雑音を指摘され来院した。胸骨左縁第2肋間を最強点とするⅢ/Ⅵの収縮期駆出性(収縮中期性)雑音を聴取し、この雑音は左頸部に放散する。

考えられるのはどれか。

- a 動脈管開存症
- b 心室中隔欠損症
- c 大動脈弁狭窄症
- d 肺動脈弁狭窄症
- e 僧帽弁閉鎖不全症

20 48歳の男性。意識障害と右片麻痺のため搬入された。自発開眼はなく、呼びかけでも開眼しないが、痛み刺激で開眼する。痛み刺激でうなり声をあげるが、意味のある発語はみられない。また、痛み刺激で右上下肢は全く動きがみられないが、左上下肢は払いのける動作を示す。

Glasgow coma scale による評価の合計点として正しいのはどれか。

- a 3点
- b 6点
- c 9点
- d 12点
- e 15点

21 23歳の女性。頭痛を主訴に来院した。16歳ころから頭痛を自覚していたが我慢できていた。約2年前から週1、2回程度、ズキズキする頭痛を自覚するようになった。市販の鎮痛薬を内服したが症状は改善しなかった。頭痛がないときには日常生活に支障がない。頭痛は一側の側頭部に強く、悪心を伴っていることが多いが、前兆や発熱はないという。

この疾患でみられるのはどれか。

- a 下痢
- b 肩こり
- c 四肢麻痺
- d 意識消失発作
- e 体動による頭痛の増悪

22 88歳の女性。肺炎のため入院中である。もともと認知症があり要介護3であったが、食事は自力摂取できていた。2日前に肺炎のため入院となり治療を行った。本日は朝には平熱となり、介助によって経口摂取も可能となった。同日深夜、物音に気付いて看護師が訪室すると、患者がベッド脇の床に倒れていた。当直医が呼ばれて診察したところ、出血や裂創はみられないが、患者は「いたい、いたい」とうめくように繰り返していた。意識レベルはJCS I-2。身長148 cm、体重44 kg。体温35.8℃。脈拍84/分、整。血圧132/80 mmHg。頭部に皮下血腫を認めない。対光反射は正常。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。上肢に麻痺を認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。腹部に圧痛を認めない。左下肢を動かすと疼痛が増強する。両足背に軽度の圧痕を残す浮腫を認める。下肢の色素沈着や紫斑を認めない。

痛みの原因を明らかにするために必要な検査はどれか。

- a 胸部造影 CT
- b 腹部超音波検査
- c 下肢静脈超音波検査
- d 胸部エックス線撮影
- e 股関節エックス線撮影

23 33歳の1回経妊1回経産婦。妊娠28週。本日朝からの軽度の下腹部痛と少量の性器出血とを主訴に来院した。妊娠27週の妊婦健康診査までは特に異常を指摘されていなかった。腔鏡診で淡血性の帯下を少量認める。内診で子宮口は閉鎖している。胎児心拍数陣痛図で10分周期の子宮収縮を認める。経腔超音波検査で頸管長15mm、内子宮口の楔状の開大を認める。腹部超音波検査で胎児推定体重は1,200g、羊水量は正常、胎盤は子宮底部にあり異常所見を認めない。BPS (biophysical profile score) は10点である。

治療薬として適切なのはどれか。

- a 硝酸薬
- b  $\alpha$  刺激薬
- c  $\beta_2$  刺激薬
- d 抗コリン薬
- e 副腎皮質ステロイド

24 89歳の女性。1年前からParkinson病のため療養病床に入院中である。71歳でParkinson病を発症し、86歳でHoehn & Yahrの臨床重症度分類5度となり、ベッド上の生活となった。87歳で家族とのコミュニケーションも困難になった。3か月前から食事量が減り誤嚥性肺炎を2回起こしている。意思表示は困難であるが、家族の声かけにわずかに表情が緩むこともある。家族は献身的な介護を続けており、1日でも長く生きてほしいと願っている。家族と今後の方針を話し合うことになった。胃瘻を含む経管栄養や中心静脈栄養など人工的栄養補給の選択肢を説明した。

家族が方針を決めるのを支援する際に、医師が伝える内容として適切なのはどれか。

- a 「一旦方針を決定すると変更できません」
- b 「これまでの本人の価値観を十分尊重してください」
- c 「人工的栄養補給を行わないと安楽死とみなされます」
- d 「最終的な方針決定には病院の倫理委員会の許可が必要です」
- e 「いずれ死亡するので無駄な人工的栄養補給は行うべきではありません」



25 52 歳の男性。職場の健康診断で高血圧を指摘され来院した。45 歳の時にも高血圧を指摘され 2 年間降圧薬を内服したが、その後は内服していなかった。食事の塩分摂取量も意識していない。喫煙は 20 本/日を 32 年間。飲酒はビール 350 ml を週 2 回程度で 20 年間。仕事は事務職で最近 2 か月の週当たりの労働時間は 65 時間以上が続いており、運動はしていない。身長 168 cm、体重 74 kg。脈拍 72/分、整。血圧 166/102 mmHg。血液生化学所見：AST 23 IU/l、ALT 18 IU/l、 $\gamma$ -GTP 23 IU/l(基準 8～50)、空腹時血糖 102 mg/dl、総コレステロール 210 mg/dl、トリグリセリド 104 mg/dl、HDL コレステロール 52 mg/dl。

この患者に対する指導として優先度が低いのはどれか。

- a 禁 煙
- b 禁 酒
- c 減 塩
- d 運動の奨励
- e 労働時間の短縮

次の文を読み、26、27の問いに答えよ。

68歳の女性。両下腿のむくみを主訴に来院した。

**現病歴** : 1か月前から遠方に住む娘の家を訪れている。3週間前から靴が窮屈となり、両足のむくみに気付いた。足に痛みや痒みはなく、歩行困難はない。動悸や息苦しさも自覚していない。最近立ち仕事が多かったためのむくみと考えていたが、改善しないため娘の家の近くの診療所を受診した。60歳で高血圧を指摘され、その後、自宅近くのA医院から降圧薬を継続的に処方されている。2か月前に新たな降圧薬が追加となった。来週には帰宅しA医院を受診する予定となっている。

**現症** : 意識は清明。身長154 cm、体重52 kg。体温36.0℃。脈拍72/分。血圧144/86 mmHg。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。両足背から下腿にかけて軽度の圧痕を残す浮腫を認める。下肢の色素沈着や紫斑を認めない。

担当医は浮腫の原因疾患を同定するために各種の精査を行った結果、今回の浮腫の原因は、A医院で追加処方された降圧薬の影響であると考えた。

- 26 患者への説明や提案として適切なのはどれか。
- a 「主治医を変えた方が良いと思います」
  - b 「病気ではありませんので、様子を見てください」
  - c 「A 医院と連携して解決方法を検討させてください」
  - d 「追加になった薬の副作用ですので、こちらでは治療できません」
  - e 「むくみをとる薬を出しますので、A 医院の薬に追加してください」
- 27 問題指向型医療記録 (POMR) の「評価」の記載に該当するのはどれか。
- a 「2 週後に再診とする」
  - b 「軽度の圧痕を残す浮腫を認める」
  - c 「副作用について患者に伝えるべきか悩んでいる」
  - d 「浮腫の原因は降圧薬の副作用である可能性が高い」
  - e 「最近立ち仕事が多かったためだと患者は考えている」

次の文を読み、28、29の問いに答えよ。

44歳の男性。右下腿の腫脹を主訴に来院した。

**現病歴** : 3か月前に右踵部に、ささくれたような傷ができたことに気付いた。市販の軟膏を塗っていたが創は次第に大きくなってきた。1か月前に自宅近くの医療機関を受診し、外用薬を処方され塗布していた。その後2週に一度、創部処置のため通院していたが、7日前から創部の臭気が強くなり軽度の発熱を認めた。2日前から右下腿が腫脹し疼痛を伴い、全身倦怠感が強くなったため受診した。

**既往歴** : 24歳から高血糖を指摘され、30歳から投薬を受けていた。40歳から通院しなくなっていた。

**生活歴** : 喫煙は40歳まで10本/日を20年間。4年前から禁煙している。

**家族歴** : 父親が糖尿病。

**現症** : 意識は清明。身長165 cm、体重55 kg。体温38.5℃。呼吸数22/分。脈拍72/分、整。眼瞼結膜は軽度貧血様だが、眼球結膜に黄染は認めない。口唇と舌は乾燥している。心雑音は聴取しない。右肋骨弓下に肝を2 cm 触知する。右鼠径部に圧痛を伴う径1 cm のリンパ節を複数個触れる。膝蓋骨上端より10 cm 近位の大腿周径は右38 cm、左37.5 cm。膝蓋骨下端より10 cm 遠位の下腿周径は右36 cm、左33 cm。右膝窩動脈は触知するが、右足背動脈、右後脛骨動脈は触知しない。右下腿に紅斑と腫脹があり、熱感を伴う。両側足底の感覚鈍麻を認める。両下腿の写真(別冊 No. 2A)を別に示す。

**検査所見** : 尿所見: 蛋白1+、糖2+、ケトン体(-)。血液所見: 赤血球428万、Hb 10.9 g/dl、Ht 35%、白血球12,200(桿状核好中球18%、分葉核好中球64%、単球4%、リンパ球12%)、血小板29万、PT 77%(基準80~120)。血液生化学所見: CK 175 IU/l(基準30~140)、尿素窒素7 mg/dl、クレアチニン0.5 mg/dl、血糖323 mg/dl、HbA1c(NGSP) 8.8%(基準4.6~6.2)。CRP 13 mg/dl。下腿造影CT(別冊 No. 2B)を別に示す。

別冊

No. 2 A、B

28 この患者の診断として最も考えられるのはどれか。

- a Buerger 病
- b リンパ浮腫
- c 壊死性筋膜炎
- d 深部静脈血栓症
- e 静脈うっ滞性潰瘍

29 対応として最も適切なのはどれか。

- a 創の縫合
- b デブリドマン
- c ワセリン塗布
- d 免疫グロブリン製剤静注
- e 長時間作用型インスリン皮下注

次の文を読み、30、31の問いに答えよ。

50歳の男性。便秘と下痢とを繰り返すことを主訴に来院した。

**現病歴** : 3週前に下痢を自覚し、その後腹痛を伴う便秘を数日おきに繰り返している。自覚するほどの発熱はない。便の色については普段からよく見ていない。飲食物や環境に特別の変化はない。過去に同様の症状はない。

**既往歴** : 特記すべきことはない。

**生活歴** : 公務員。喫煙歴はない。飲酒は焼酎1合/日を30年間。海外渡航歴はない。

**家族歴** : 特記すべきことはない。

**現症** : 意識は清明。身長174 cm、体重72 kg。体温36.5℃。脈拍80/分、整。血圧118/72 mmHg。呼吸数16/分。皮膚は湿潤。顔色は良好である。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。口腔内の乾燥を認めない。頸静脈の怒張を認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦で静脈怒張を認めない。腸雑音はやや亢進している。触診では抵抗を触れず、肝・脾を触知しない。下腹部正中やや左側に直径約4 cmの弾性硬の腫瘤を触れる。腫瘤表面は凹凸不整で可動性があり、圧痛を認めない。直腸指診で粘血便を認める。

**検査所見** : 尿所見：蛋白(－)、糖(－)、ケトン体(－)、潜血(－)。血液所見：赤血球468万、Hb13.9 g/dl、Ht42%、白血球8,300、血小板21万。血液生化学所見：総蛋白7.5 g/dl、アルブミン3.9 g/dl、総ビリルビン0.9 mg/dl、直接ビリルビン0.2 mg/dl、AST28 IU/l、ALT16 IU/l、尿素窒素12 mg/dl、クレアチニン0.6 mg/dl、尿酸6.9 mg/dl、血糖98 mg/dl、総コレステロール246 mg/dl、トリグリセリド190 mg/dl、Na131 mEq/l、K4.4 mEq/l、Cl97 mEq/l。CRP1.0 mg/dl。

30 腫瘍性病変の原因として考えられるのはどれか。

- a 腹壁腫瘍
- b 腸管内ガス
- c 消化管腫瘍
- d 炎症性腫瘤
- e 重積した腸管

31 身体診察と血液検査の結果を患者に伝えたところ、患者から心配そうな表情で「何か重い病気でしょうか」と質問があった。

医師の回答として調査的態度に該当するのはどれか。

- a 「次の検査の日程を立てましょう」
- b 「どんな病気を心配されていますか」
- c 「何か重い病気ではないかをご心配なんです」
- d 「心配ばかりしては治るものも治りませんよ」
- e 「必要な検査が済んでいないのにそんな事を考えてはいけません」











